# 外務省執務報告

全12巻

解説＝臼井勝美・濱口學・原口邦紘

太平洋戦争に至る日本外交の
全貌を明らかにする外務官僚執務の「機密報告書」。

クレス出版

# 刊行にあたって

さきに刊行した「外務省公表集」に続いて今回「外務省執務報告」を復刻する。

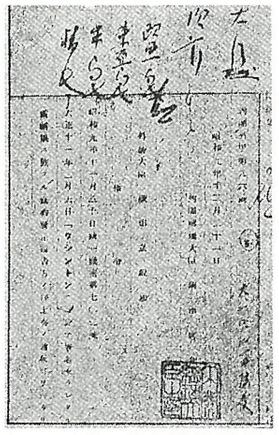
外務省執務報告は、外務省が各局・部を中核にして課単位で執務の内容を記載し、年次ごとに纏め印刷に付したものである。当然「機密」の扱いを受けていた。現在はもとより公開されているがそのもつ価値は必ずしも十分に認められていなかった。

執務報告の重要な意義は、外務省の各局部がその年度どのような執務をしたかが、網羅的かつ具体的に把握できる点にある。執務の対象になった事柄が、選択されることなくすべて記載されるので、日本外交の軌跡をたどる上での基本的な文献と云えよう。

外務省の役割が単に政治的な外交交渉だけでなく、在外日本人の保護などきわめて煩瑣な日常業務にまで及んでいることを改めて認識させるのである。

執務報告のなかに外務官僚の隠れた衿持を見いだすことも出来るであろうし、あるいは侵略戦争のまぎれもない痕跡と証左を認めることも出来るであろう。そしてまた個人の運命への歎声を洩らさざるを得ないような場面に遭遇することもあろう。

いずれにせよ本「執務報告」は準戦時、あるいは戦時体制のもとにおける日本外交の全貌を明らかにする上で、もっとも貴重な史料の一つとなると信ずるものである。



**ワシントン条約廃棄通告文書**
広田弘毅外相、重光葵次官、東郷茂徳欧亜局長のサインがある。

# 『外務省執務報告』を広く推す

亜細亜大学学長
東京大学名誉教授
衞藤瀋吉

日本の外務官僚は、概して醒めた目で冷徹に事案を眺め、暢達かつ簡潔に、複雑な経緯を記録する。その能力では一流だと思う。昭和六年九月十八日の柳條湖事件に際しても、その鉄道爆破が関東軍の一部の手によってなされた事実を当時の奉天総領事森島守人は、淡々とした筆致で正確に本省宛報告している。昭和十五年夏バトル・オブ・ブリテンに際しても、駐英大使重光葵は冷徹に英国の抗戦力の強靱（じん）さを分析していた。英国外交官は、このような冷静かつ客観的な叙述では定評がある。かつて私もロンドンのパブリック・レコード・オフィスでこのような外交文書を読み、英国外交官への敬意を新たにしたことがあった。

その定評ある英国外交官のよく訓練された記述にも劣らないのが、我が外交官の事案の記録である。外務省は「執務報告」として、我が国に関係ある各地の出来事を、詳細にしかも要領よくまとめて記録にとどめてきた。

この度、クレス出版は、臼井勝美および濱口學両教授の解説を付して、一九三六（昭和十一）年から一九四〇（昭和十五）年の間、東亜局、欧亜局と亜米利加局で編纂された執務報告を復刻されるという。臼井教授は外交文書室になが年勤務されて、我が国の外交文書に詳しく、比肩する者なき日本外交史の重鎮であり、濱口教授は東大の大学院以来国際政治史の研究に沈潜する篤学の士である。解説者として正にその人を得たというべきであろう。

またクレス出版はこのような基本資料の編纂や復刻では各界に信頼厚く、すでに『外務省公表集』全一二巻、『戦前期国勢調査報告集』全一九巻、『朝鮮総督府施政年報』全三〇巻など多くの復刻を手がけてきた。正に出版社も格好のところといい得よう。

以上、この『外務省執務報告』の復刻本を広く推薦するゆえんを記した次第である。

# 『外務省執務報告』の刊行を歓迎する

青山学院大学教授
渡邉昭夫

外交政策決定過程を外から観察したり批評したりする学者・研究者にとって歯がゆい思いをするのは、政策の立案・実施の当事者たちが、どのような情勢認識に立ってあれこれの選択をし、行動しているのかをなかなか知り得ないことである。眼前に起こりつつある事態に関してはともかく、歴史に属することがらについても、また、そのような知的欲求の不満を感じさせられる。

今回刊行されることになった『外務省執務報告』は、そうした知的欲求に応えてくれる貴重な情報に満ちている。何時ころから如何なる経緯で、こうした慣行が生じたのかは詳かにしないが、この文書はその形式から見て、省内の各局課別に、その主管業務や関連業務について過去一年間の情勢と活動内容をまとめ、省内や要路の執務参考として限られた範囲に配布したもののようである。

外交史料館に現存しているのは、昭和11年から17年（1936～1942）までのもので各部局に亘っていると承知しているが、今回復刻されるのは、そのうち、東亜局、欧亜局と亜米利加局のものだそうである。日中戦争から日米戦争に至る重大な時期であるだけに、その史料的価値は一層高いと考えられる。将来、南洋局、条約局、通商局などのものも復刻されることを期待したい。

この資料はアメリカが占領中に接取してマイクロ化したそうで、それには外交史料館に現存しないものも含まれているという。将来、その失われたものの所在を突き止め、あるいは復刻することも、今後のわれわれの課題であろう。

目の肥えた観客や鋭い批評家があって役者の芸もよくなるのと同じように、政策決定の実態を語るこうした第一次史料が公開されて外部の人間の目に触れることが、外交の質を向上させることになる。その意味でも今回のこの『外務省執務報告』の復刻は快挙というべきである。

## 外務省執務報告　東亜局　一九三六―一九三八

外務省は一九三四年六月機構の改革を行い、それまでの欧米局を亜米利加局と欧亜局に分け、亜細亜局を東亜局とした。

本執務報告はこの東亜局の一九三六年から三八年までの執務報告に、三九年、四〇年の一部を加えて構成される。

東亜局のこの時期の局長は桑島主計、森島守人、石射猪太郎というそれぞれ優れた個性と経綸をもつ三人の外交官であるが、とくに石射の任期が長い。組織は三課構成でその執務分担は次の通りである。

第一課　中国・香港・マカオ
第二課　居留民の保護取締、シャム
第三課　満州国

満州国が担当範囲になっているのが注目される。中国、シャムとならびすくなくとも建前として外国とされていたのである。

一九三六年―一九三八年という意味は、いうまでもなく日中戦争が勃発した年、すなわち一九三七年を含む三年間であるが、とくにこの時期を選定したというわけではなく、現在のところ東亜局の執務報告が最も揃っているという便宜的な理由である。

しかし便宜的なものであってもその意義は別である。この執務報告によって日中戦争がまだ開始されていない前の一年、開始された年、そして開始後の一年、この三年にわたる東亜局の活動の全貌を知ることができる。アジアの二大国がどのような経過のもとに全面戦争にはいったのか、日本の中国占領の形態はどうであったか、また建国後数年たった満州国の現況はどうか、これらの問題点についてもっとも具体的かつ包括的な事実が豊富に提供される。しかもその一部については残念ながら記録がすでに失われている。

本「東亜局執務報告」は、その情報量の重さと広さの点でこの時期の史料群のなかでも重要な地位を占めるものとみられる。

（臼井勝美・桜美林大学教授）

## 外務省執務報告　欧亜局　一九三六―一九四一

本執務報告は、一九三六年から四一年まで、外務省欧亜局第一課のそれを中心とし、第二課、第三課のものを出来る限り加えて構成される。

欧亜局のこの時期の局長は東郷茂徳、井上庚二郎、西春彦、阪本瑞男の四人であるが、欧亜局の前身である欧米局の時期も含めて四年半余りを勤めた東郷は特に任期が長い。また他の三人も一年半前後から二年弱の任期のうちにそれぞれ世界史的重大事件と遭遇している。欧亜局を構成する三課の執務分担は次の通りである。

第一課　ソ連とその隣接欧州・イスラム諸国
第二課　軍縮、西欧諸国、インド、近東、アフリカ
第三課　蘭印、インドシナ、太洋州、マレー、シンガポール

この分担で注目されるのは、英独仏伊などの重要性とは別に、ソ連の比重が極めて大きいことであり、また、一九四〇年の南洋局設置まで、欧州列強とその植民地的従属地域を包括的に管轄していることである。

本執務報告の対象とする時期は欧州の国際緊張が既に第二次世界大戦の前哨戦の様相を呈し始めてから独ソ戦の開始によって文字通り世界大戦に戦火が拡大するまでであり、ソ連をめぐる広範かつ複雑な国際関係の中で日本が展開した外交政策の細部をはじめ、さまざまな案件に欧亜局が持った認識や判断の全貌をつぶさに確認することが出来る。本執務報告は、その意味で、一部消失してしまっている外務省記録ファイルの欠落を補う貴重な原史料なのである。また、執務分担の地域的特徴などもあり、報告全体をあわせ繙けば、日本の対欧州外交の間口と奥行き、さらに全体構造とその中での個別課題の位置付けを俯瞰する有力な手掛かりを得ることになる。

（濱口學・國學院大學教授）

■内容見本　東亜局　昭和十一年(1)　西安事件

有田大臣ノ英大使ニ對スル回答

(三)　有田大臣ノ英大使ニ對スル回答

右ニ對シ有田大臣ハ二十四日他用ヲ以テ來訪セル英國大使ニ對シ口頭ヲ以テ左記趣旨ヲ述ヘタリ

帝國政府トシテハ蔣介石ノ生還ヲ希望シ居ル次第ナルカ情報ニ依レハ南京政府部内ニ於テモ學良問題ニ付テハ意見一致シ居ラス孔祥熙一派ノ蔣院長近親者ニハ蔣救出ニ熱心ナル餘リ學良トノ妥協ヲモ辭セサルカ如キ氣配アルヤモ知レサルカ他ノ一派ハ正面ヨリ學良討伐ヲ主張シ居ル趣ナリ又此ノ問題ニ付テハ日本トシテ機微ナル關係ニアルコトハ學良カ容共抗日ヲ南京政府ニ強要シ居ルコトニシテ此ノ點ニ關スル我カ國民的感情モ考慮セサルヘカラス何レニスルモ本件ハ結局南京ト學良ノ交渉ノ經過如何ニ係ルヘシ

右ニ對シ英國大使ハ英國側トシテモ支那ノ内政ニ干渉セントスル意嚮ハナク唯學良カ自己ノ飛行機ニテ天津邊ニテモ逃ケ來レル時ハソレヨリ先キノ安全ヲ保護セントスルモノナル旨ヲ述ヘタリ

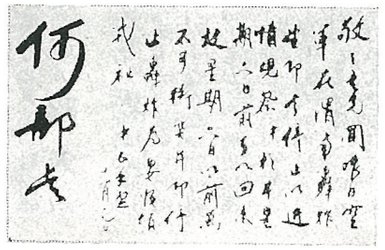
英米佛伊大使ノ支那側ニ對スル申入

(四)　英、米、佛、伊大使ノ支那側ニ對スル申入

右提議ハ在支英國大使ヨリ夫々米、佛、伊大使ニ申入レラレタル處本國政府ヨリ大體贊同ノ訓令ニ接シタル趣ニテ二十三日先ツ伊國大使ヨリ孔祥熙ニ對シ單獨申入レヲナシ翌二十四日英、佛、米ノ三大使モ本國政府ヨリ接受セル訓令ヲ持合セ商議ノ結果中央側ニ對シ三國別々ニ「中央政府ノ要請アルニ於テハ今次事件ノ結果トシテ學良カ開港場ニ達シタル場合之ニ「ソーフ、コンドーイ」ヲ與フルノ用意アル」旨申入ルル事トナリ同日午後四時佛、英、米ノ順序ニ孔ヲ往訪シ同趣旨ノ申入レヲナシタリ孔ハ之ニ對シ單ニ感謝ニ堪ヘサル旨ヲ述ヘタル趣ナリ

時事新報
蒙難兩週後
蔣委員長已脫險抵洛
下午五時半在潼關安降
蔣夫人宋子文等同行
委員長搭蔣夫人宋子文等一行數人已於今日下午五時半機抵洛陽

蔣介石帰還を報ずる号外（昭和11年12月25日　時事新報）



監禁中の蔣介石が軍政部長何応欽に送った手紙

## 外務省執務報告　全12巻　揃定価二六〇、〇〇〇円（税別）

●東亜局　全6巻　昭和11年～昭和15年　解説：臼井勝美
一九九三年十月刊　揃定価一三五、〇〇〇円（税別）
ISBN4-906330-84-3 C3331

●欧亜局　全3巻　昭和11年～昭和15年　解説：濱口　學
一九九四年二月刊　揃定価七〇、〇〇〇円（税別）
ISBN4-906330-85-1 C3331

●亜米利加局　全3巻　昭和11年～昭和17年　解説：原口邦紘
一九九四年六月刊　揃定価五五、〇〇〇円（税別）
ISBN4-906330-86-X C3331

**続刊**　第二期　全9巻　揃定価二二〇、〇〇〇円（税別）

●通商局　全4巻　揃定価一〇六、〇〇〇円（税別）
●條約局　全2巻、情報部、調査部、文化事業部各1巻　揃定価一一四、〇〇〇円（税別）

■クレス出版好評既刊書　呈詳細内容見本（定価は税別）

## 外務省公表集

全12巻　佐藤元英監修・解題
外務省から文書によって発表された主として声明、談話、通告、説明、交換公文などの外交関係記事を蒐集し、記録に留めるために編纂されて、公刊されたもの。大正八年から昭和十八年までの二二輯と「満州事変及上海事件公表集」「支那事変関係公表集」も含む。
A5判／総七、三〇〇頁／揃定価一八二、〇〇〇円

## 外務省沿革類従

全1巻　小林和幸解説
慶応四年正月太政官に外国事務掛が置かれた時より、明治二年七月の外務省設置を経て、明治九年に至るまでの外務省沿革を輯録。近代的外政機関として創設され確立される過程の外務省の人事、機構、各種施設、機能の変遷の重要部分を伝える基礎資料。
A5判／一、三〇〇頁／定価二五、〇〇〇円

## 日清講和関係調書集

全13巻　明治期外交資料研究会編
明治期外務省調書集成第一回　日本外交史研究のための根本資料である『日本外交文書』の欠落部分を補完するのみならず、日本外交のより生き生きとした歴史事実を解明。「日韓交渉略史」「日清韓交渉事件記事」「日清講和始末」「露独仏三国干渉要概」「蹇々録」他。
A5判／総八、〇二二頁／揃定価一九三、〇〇〇円

## 日露講和関係調書集

全9巻　明治期外交資料研究会編
明治期外務省調書集成第二回　外交交渉当事者、外交事務担当者によって、自身の経験あるいは事務処理の過程の上で作成された報告書集。日露交渉ニ関スル往復、日露事件要報、日露事件外評一斑、日露講和会議録・談判筆記、満州ニ関スル日清交渉会議録他。
A5判／総五、八四二頁／揃定価一四五、〇〇〇円

## 外務省制度・組織・人事関係調書集

全9巻　明治期外交資料研究会編
明治期外務省調書集成第三回　日本外務省の制度改革、組織変遷、および外交にたずさわった人々の経歴業績に関する情報書集。外交官及領事官年鑑、外務省年鑑、外務省附統監府及関東都督府人事ニ関スル法規、外務省人事法規、領事官執務参考書を収録。
A5判／総五、三〇〇頁／揃定価一三五、〇〇〇円

## 条約改正関係調書集

全18巻　明治期外交資料研究会編
明治期外務省調書集成第四回　明治時代の社会史・思想史・政治史・外交史ないしは経済史の結節点でもある条約改正問題に関する、稀少かつ重要資料集。井上外務大臣時代条約改正問題、条約改正記事、条約改正関係条約調査報告集、小村条約改正関係、条約彙纂他。
A5判／総一二、九八〇頁／揃定価二八四、〇〇〇円

〒103 東京都中央区日本橋小伝馬町14-5　メローナ日本橋
☎03(3808)1821 FAX03(3808)1822　http://www.kress-jp.com/
KRESS 株式会社クレス出版